

Title	マンチェスタアに於ける社会・経済的調査 ( J. S. Ashton, Economic and Social Investigations in Manchester 1833-1933. pp.xii., 179., 1934. )
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.8 (1934. 8) ,p.1223(79)- 1232(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19340801-0079
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340801-0079">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340801-0079</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## マンチェスターに於ける社會・經濟的調査

(J. S. Ashton, Economic and Social Investigations in Manchester

1833-1933. pp. xii, 179, 1934.)

野村兼太郎

本書はマンチェスター統計協會の報告書を詳細に検討して、その業績を年代順に記述したものである。第十九世紀の初期に於いてマンチェスターは新興都市として急激なる發達を遂げた。一八二一年と一八三一年との僅か十年間に、その人口は四割五分の増加を見せてゐる。この躍進的發展は、他方に於いて、多くの知的活動を生ぜざるを得なかつた。殊にそれ等の人口増大が地方民の流入やアイルランド人の移民に基く關係上、幾多の社會經濟問題を生んだ。かゝる事情から一八三三年の秋に至つてマンチェスター統計協會の設立を見るに至つたのである。これはロンドンの統計協會、即ち今の王立統計協會に數ヶ月先立ち、英國に於ける最初の統計協會であつた。この協會の活動の歴史は新工業都市たるマンチェスターの社會的變遷を示すものである。今本書に現れた記事を一々紹介することは困難であるから、主として英國發展史に關係あり、又吾人にとつて興味ありと思はるゝものについて簡単に記述しよう。

本書の第二章は初期の社會調査と題する。その中吾人の最も關心を有する點は紡績工場に於ける労働問題であらう。一八三三年に、織維工場に於ける最低年齢を九歳に、又十八歳以下の青少年労働時間の制限を規定せる工場法が通過した。この法令は Sadler, Ashley 等の所謂十時間労働の主張者にとつて不満足であつたばかりでなく、資本家側にとつても反對であつた。協會では工場主たる Samuel 及び William R. Goss なる兄弟の資本家に報告させてゐる。それに従へば、綿工場に於ける労働者の健康及び道德状態は他の工場に劣るものではない。労働時間の長いことは決して少年を過勞せしむるものでもなく、その健康や體質を損ふものでもない。屢々攻撃される、虐待酷使は全く根據なきことであるとして、當時の綿工場の辯護をなしてゐる。しかしその數字的實證は少しも記述してゐなす。

當時蒸氣力がどの程度まで使用されてゐたか。一八三七年になされた Richard Biley の報告がこれを語つてゐる。一八三六年に、マンチェスター及びソールフォードの總計は九、九二四馬力半であつた。蒸氣力の發展は燃料の供給に依存するものである。James Meadows の同年の報告に依れば、マンチェスターに於ける石炭購入量は次ぎの如くである。

一八三四年	七三七、〇〇八噸
一八三五年	八二〇、〇〇〇噸
一八三六年	九一三、九九一噸

この時代のこの激増は交通機關の改良に基くものである。當時鐵道は未だ十分に利用されてゐたとは云ひ難い。従つて一八三四年及び一八三六年共に六割三歩まで運河を利用してゐる。殘餘を徵稅道路及び鐵道に依つて運搬し

た。

蒸氣力及び石炭の使用と相關聯して、手織工の運命は最も注目すべき問題の一つである。手織工は當時東南ラシカシヤの労働階級の重要な部分を占めるものであつた。これ等の手織工を戸別調査の結果、次ぎの如く發表された。調査された家族、四千二百戸の内、五割五歩がイギリス人、約四割三歩がアイルランド人、九厘がウエール人、五厘がスコットランド人であり、宗教は半ばが英國教會、三分の一が舊教信者であつた。四分の三は家に住み、二十分の二強は空借り、殆ど五分の一が穴藏住ひであつた。三分の一以上は "comfortable" と報告されてゐる。家は甚しく區々である。標準は一週一志六片から三志の間で、四志以上支拂ふ者は比較的少ない。一萬二千百十七人の兒童中、小學校に通ふ者僅かに二百五十二人、日曜學校に行く者四千六百八十人に過ぎない。實際上二家族中に平均二人の働手があつた。働手の二割八歩は工場に通ひ、二割七歩が手織工、八歩が倉庫に、同じく八歩が建築業に勤めてゐた。

この研究に刺戟されて、マンチェスターの未調査の區域を始め、他の諸都市の調査が一八三四―一八三六年になされた。その結果、マンチェスター及びリヴァプールの舊工業中心區域よりも、北部、東部の新工業都市の方が、住宅状態が優秀であることが解つた。

そこで新しき生産業が労働者の生活状態の悪化に、どの程度まで責任があるか問題とされた。そのために純粹の農業區域の労働者の状態の調査をなし、比較したが、勿論都市の労働者の状態より優秀であつた。

ハルに於いて、同様の調査が一八三九年に戸別毎になされた。その結果ラシカシヤの他の都市より優良であつた。即ち労働者にして穴藏住ひの者はリヴァプールでは五分の一、マンチェスター及びソールフォードでは十分の一

であるのに對し、ハルでは一萬人について十五人に過ぎなかつた。この理由を人種に求めてゐる。即ちハルではイギリス人が九割五歩と云ふ大部分を占めてゐるからだと云ふのである。しかしそのハルに於いても労働者の状態はかなり悲惨なものであつたらしい。一例を採れば、調査した約三分の一は、一つの寢臺に三人以上、一割三歩は五人以上、七人以上眠れるものは百三件あつたと云ふ。

かうした状態で教育等の十分行はれる筈がない。未就學兒童の多いばかりでなく、教師自身の無知と貧乏とは甚しいものがあつた。一八三六―七年、この方面の調査が行はれてゐるが、こゝでは割愛する。

第三章は死亡率と鐵道労働と題する。工場制度の發達と死亡率が次いで問題とされたが、これは後に公衆衛生を問題とする所があるから、そこに譲つて、鐵道の發達とその労働者についてなされた議論を紹介しよう。

鐵道は一八三六―七年に大規模に布設され始め、さらに一八四三―六年には數千哩の鐵道が新設された。これ等の新設には多くの労働を要する。大部分が地方農民及びアイルランド人がその供給者であつた。一八四五―六年の統計協會のある會合で、John Robertson が「鐵道建設に従事する労働者に及ぼすある害毒について」と題する報告をなしてゐる。それは主としてマンチエスタア・シェフィールド鐵道のサムミット・トンネルの工事を材料としたもので、それに依るとこの工事に際し、少くとも三十二名以上の命を奪ひ、かつこれ等労働者の生活状態の悲惨なる墮落を指摘してゐる。この報告は反響を生んだ。Edwin Chadwick は雇主がすべての事件の財政的責任を負擔するのみならず、鐵道事業に對しては國家の監督に従はしめんことを提議した。又雇主側からは該サムミット・トンネルを監督せる Thomas Nicholson が慘事の多くは労働者の不注意と不柔順から起るものと斷じ、一々例證した。さらに協會の誤謬を指摘し、死亡者は二十六名に過ぎずして、同規模の他の事業よりも死者の少なき旨を述べた。又物品

給與制度労働者の道德的頹廢等に對する攻撃について、それぞれ辯護した。しかし結局 Rawlinson 及び Chadwick の説が正しいとされるに至つた。

第四章には公衆衛生に關する論争を述べてゐる。五十年代の初期に於いてはこの論争が最も中心的であつた。Edwin Chadwick が一八四二年に救貧法委員會に於いて、有名なる「大英國労働人口の衛生状態に關する報告」を提出した。それを都市保健委員會が一八四四年に公刊し、その結果、一八四八年の保健條令となり、中央保健省の設立となつた。この状態に應じて、統計協會も活動した。一八五三年から一八七五年までの間に提出された報告百二十二の内三分の一近くは衛生及び救貧法を問題としたものであり、その半ば以上、醫者に依つて提出されたものである。當時未だ醫學は十分進歩してゐなかつたが、公衆の保健については二派あつた。一つは死亡率の大であるのは塵埃や不潔のためであるとする者、他の一つは全然他の理由にその主因を求めんとする者である。前者の代表者は前記の Chadwick を始め John Robertson、Joseph Adstead 等が擧げられる。それ等の努力に依つて保健又は清潔のための種々なる手段が實行された。それにも拘らず六十年代の中頃に於いて、マンチエスタアの死亡率は増大する一方で、ある區域に於いては出生率よりも死亡率の方が多きところさへあつた。かゝる事情はこの一派の反對派をして盛にこれに批判を加へさせるやうにした。その批判の一つは Alfred Aspland に依つてなされた。彼は軍隊が平時にあつて生ずる疾病及び死亡の原因を嚴密に調査し、不潔や汚穢は疾病の有力な原因ではあるが、それが唯一の原因ではないことを説明した。又 Daniel Noble の如きは興味多き報告をなしてゐる。即ち當時起つた有名な「綿花饑饉」と死亡率との關係を調査したもので、工場が仕事を休止したため、空中の綿毒を少なからしめ、又労働者の飲酒量を減じ、死亡率を低下したことを示した。

かゝる論争は、益々公衆保健の問題に對して、政府の活動を見るに至つたのである。事實この問題を明かにするために、完全なる人口統計、又出生死亡届出の規定を必要とし、中央政府の活動を要求される。しかし中央政府の極端なる干渉に對しては、多くの反對論を生じてゐた。

第五章に於いては普通教育に關する論争を述べてゐる。こゝには略す。

以上の諸章に於いて著者は主として社會改良に關する統計協會々員の活動について記述してゐるが、第六章以下に於いて、同じ時期に於ける經濟的方面への活動を述べてゐる。最初に景氣の變動及び銀行政策についてである。一八一五年、一八三五年、一八三五年、一八四七年、一八五七年、一八六六年と相次ぐ恐慌、殊に一八五七年の財界恐慌に當面し、恐慌の原因、及びその統計的研究が盛に行はれ始めた。著者はこゝで當時統計協會を中心として發表せられた一連の學説を紹介してゐる。William Langton, T. H. Williams, John Mills の三者について、その恐慌學説を要領よく紹介してゐる。吾人はこゝにその一々を再述する餘裕もなく、殊に近時多くの恐慌學説史が出版されてゐる時、その必要もなからう。唯著者がその學説と協會との關係、及びその後の恐慌學説との一例へば Mills と Wesley Michell との如き——關係を短文中に巧みに説明してゐることを指摘すれば足りるであらう。當時唱へられた恐慌學説は結局信用循環に基礎を置き、恐慌を避くるためには、實務家の主觀的改善を待つより外なかつた。統計協會はさうした學説上の問題とは別に、もつと實際上の技術の問題にも興味を有つてゐた。五十年代の當面の問題として、株式組織の銀行がその責任は有限なるべきや、又は無限なるべきやの問題、又預金に利子を附するや否やの問題等が論ぜられた。又英國銀行發達史上、最も注意すべき一つである支店制度の發達について、及び英蘭銀行に於ける商取引の殘高勘定の變化に關し Henry Baker の有用なる發表があつた。さらに割引率の周

期的變動やそれらに關して銀行紙幣の發行の問題等、何れも實際的主題を取扱つたものであり、英國の金融發達史に直接關係がある。

第七章には Stanley Jevons の事業を主として取扱つてゐる。Jevons は一八六五—六六年の會期に於いて同協會の會員に推薦されてゐる。又六九年から七一年まで Langton の後を襲ふて會長となつてゐる。マンチェスタア統計協會とは極めて密接な關係を有する。彼がマンチェスタアに來たのは、協會員になる二年前、一八六三年で、一八七六年ロンドンの University College にその職を得るまで、こゝに生活してゐた。彼が協會の會報に一八六七年に始めて寄稿した論文は公益事業、例へば郵便、電信等の國家統制に關するもので、例の四つの原則を假定して議論せるものである。第二のものは一八六八年になした國際貨幣會議に關するものである。世界に於ける貨幣に依る自由貿易を主張したのは英國であり、それを暗示したのはマンチェスタアである。貨幣の統一は自由貿易の導入に續くべきものであるとして主張した。一八六九—七〇年の會長就任講演は先づ自由貿易に對する辯護論であつた。「商業のあらゆる行動こそ一つの互惠條約である」と云ふ一句を残したのもこの講演に於いてであつた。その外教育問題等廣汎に亘つて論及した。しかし最も學問的價値ある論文は一八七四年になされた「經濟學に於ける數學的學説の進歩」であらう。これに關してこゝに多く説明する必要はない。後年に於いて Jevons は社會問題の研究に没頭するやうになり、酷評に關する研究の如きはその一つで、一八七六年に發表してゐる。これが統計協會と關係ある論文の最後のものである。Jevons の友人關係及び Owens College に經濟學の講座のあつたことは、知名の經濟學者として協會の會報に寄稿せしむる縁となつた。即ち Bonamy Price, Leon Levi 等がある。又 Owen College に於ける Jevons の後繼者 Robert Adamson. それに次ぎ J. E. Crawford Munro. 何れも協會と密接な關係を有して

みた。それ等の人々の寄稿論文について、著者は要領よく説明してゐるが、こゝには省略する。

第八章は一八七〇年から一九〇〇年に至る社會風潮を述べ、それが統計協會に及ぼした反響を説明してゐる。著者はこの時期を目して政治的には民主主義の著しく發達せる時期となしてゐる。經濟上に於いては英國の對外貿易に對し、外國の競争が起り、社會主義と帝國主義とが相對立した時期である。従つて協會の會員が意見も示さず、批評もしなかつた政治又は經濟問題は極めて僅かである。勿論一々これ等について論及することは出来ない。今著者が擧げてゐる内から注意すべきものを採ると、マンチエスタアに於ける協同販賣組合の問題と John Wats の意見。Henry George の影響。Charles Booth の貧民研究の實際的影響。Imperial Federation League との関係等である。

一八八七年一月協會に於ける League の計畫に關する Howard Vincent の講演は、自由貿易より互惠主義に少くとも眞の自由主義時代の來るまでは植民地を結合せる大英帝國の建設に向つて進む必要を力説してゐる。著者がその後附した、この會合に招待された自由貿易主義者 John Bright の出席拒絶の手紙は誠に興味多く讀まれる。その後著者は「かつて Richard Cobden の所屬してゐた一協會に於いて、かくの如き問題が論及されなければならなかつたと云ふ事實は、古い會員達の心を亂さぬわけにはゆかなかつた。そは嵐の來たらんとする前兆であつた。」と述べてゐる。

第九章は綿業と人口統計と題する。第十九世紀の最後の二三十年間になされた統計的研究の中、綿業と人口とに關する主要なものを擧げてゐる。その内、綿業に關して著しく目につくことは、外國の競争に關し頗る鋭敏になつてゐることである。例へば大陸及び合衆國の原綿消費量が英國より多いとか少ないとかを論ずるが如き、又外國に於ける生産費の低廉と勞働時間短縮不可能論の如きがそれである。これに關し、吾人にとつて面白く思はれる例が一八九二年の William Fogg の報告中にある。それは紡績機械輸出に關するもので、機械が輸出され、印度綿布が安價に作られ、日本市場を冒す恐れがあると云ふのである。今から僅か四十數年前であるが、誠に隔世の感がある。人口統計に關するものは、大部分 Thomas Abercrombie Welton の報告である。その統計方法が漸次に精密となり、専門的になつて來たことは注意すべき點である。例へば死亡率を見る場合でも、唯全體數を擧げることの危険を認め、年齢別、職業別、性別等に注意するに至つた如きである。單に長命者の數だけを算へる時には、Lancashire 及び Cheshire は他州に比して頗る悪い。しかし六十五才から八十五才までの死亡率を比較して見るとさう甚しく悪くはない。かうした統計技術の進歩は當然國勢調査等に種々なる加工、訂正を加へた研究が發表されるやうになつた。

第十章は第二十二世紀と題する。この世紀に現れた時勢の變化は諸研究報告に反映してゐる。先づ第一に一九〇一年の G. H. 伯に依つてなされた英國々民の體質に關する疑念に始まる。ポア戦争に際し、十萬のポア人を雇服せしむるに、二十五萬の軍隊を必要とした。マンチエスタア地方から出征を希望した一萬一千人の内、銃を取るに不適當な者、戰場に耐へ得ざる者として、陸軍當局から拒絶された者は八千人に及び、残り三千人の内僅かに千二百人だけが兵士たる標準體質を有すると判定されたのであつた。次いで數年後 Mary Duddy の心的衛生學に關する報告があつた。精神的缺陷は營養不良の産物であると云ふに反對して、「營養不良は知的薄弱の結果にして、原因にあらず」と斷定した。

前述せる世界商業界の變化は、殊に獨逸の發展は當然保護貿易への轉換を旺ならしめた。關稅問題は重要な議題

となつた。Gustav Jacoby は「もし一八八二年の英佛協定に専門家達が参加してゐたならば、コブデン條約は改新されてゐたらうと云ふのが、實業界の輿論である」として、關稅條約等に専門家の参加を要求してゐる。Hilaine Belloc が一九〇七年になした關稅の弾力性に關する講演の如きは、統計協會設立者達の意向とは甚しくかけ離れたものであつた。

以上の二つの點と共に、中心となつたのは社會問題である。多くの人々に依つて種々なる社會政策的施設が論ぜられたが、本書の記述は頗る簡單である。一九一四年以降、最近の分については、著者は史家の領分にあらずとして、名稱を列擧してゐるに止まる。

第十一章はマンチェスター統計協會自體の歴史である。こゝに記述する必要があるまい。

以上の簡単な抄録に依つても、大體本書の内容を窺ふことが出来る。著者は報告書を巧みに利用して、事實を記述してゐる。しかし少しも批判は加へてゐない。それは統計協會の歴史と云ふよりも、又マンチェスター經濟史と云ふよりも、むしろ英國そのものの最近百年間の激變を物語るものと云つてよからう。それだけマンチェスター自體について得るところは少ない。しかしそれは表題の示すが如くマンチェスターに於ける社會經濟的調査なのでから止むを得ない。

著者 F. S. Ashton はマンチェスター大學に於ける金融財政の講師ではあるが、他方「産業革命に於ける鐵と石炭」(一九二四年)の如き經濟史的勞作——彼自身の言葉に従へば、史家の著述にあらずして、經濟學説を説く教職にある者の餘業(同書、序文)であるが——ある。従つて彼の學說的關心は本書に於いても隨所に現れてゐる。

## 電力時代の認識

—W. N. Polakov; The Power Age, its Quest and Challenge, N. Y. 1933. の紹介—

藤 林 敬 三

最近のアメリカから、吾々は屢々 Technological unemployment と云ふ言葉を聞き、或はまたテクノクラシーの思想が忽然として全米を、そして全世界を風靡し去つたのを知つてゐる。これ等は——その正否は暫く別として——確かに進歩せるアメリカ産業技術の現状を反映するものである。今日世界を通じて、アメリカとドイツが、技術的進歩の水準に於いて他の諸國を凌駕してゐることは人のよく知る所である。そして前者が特に世界大戦後はより好都合な經濟的諸條件の下に資本主義の技術的水準を引上げて來たこともまた明かである。アメリカ經濟を論ずるものが、その技術的基礎に觸れない譯けには行かぬのは素よりであるが、最近特に多くの人々が、社會科學者は云ふまでもなく技術家自身も亦、進歩せる産業技術に關する社會科學的認識を要求しつゝある。

此處に私が紹介しやうとするボラコフの近業『電力時代』(The Power Age (註))は、産業技術家としての著者が